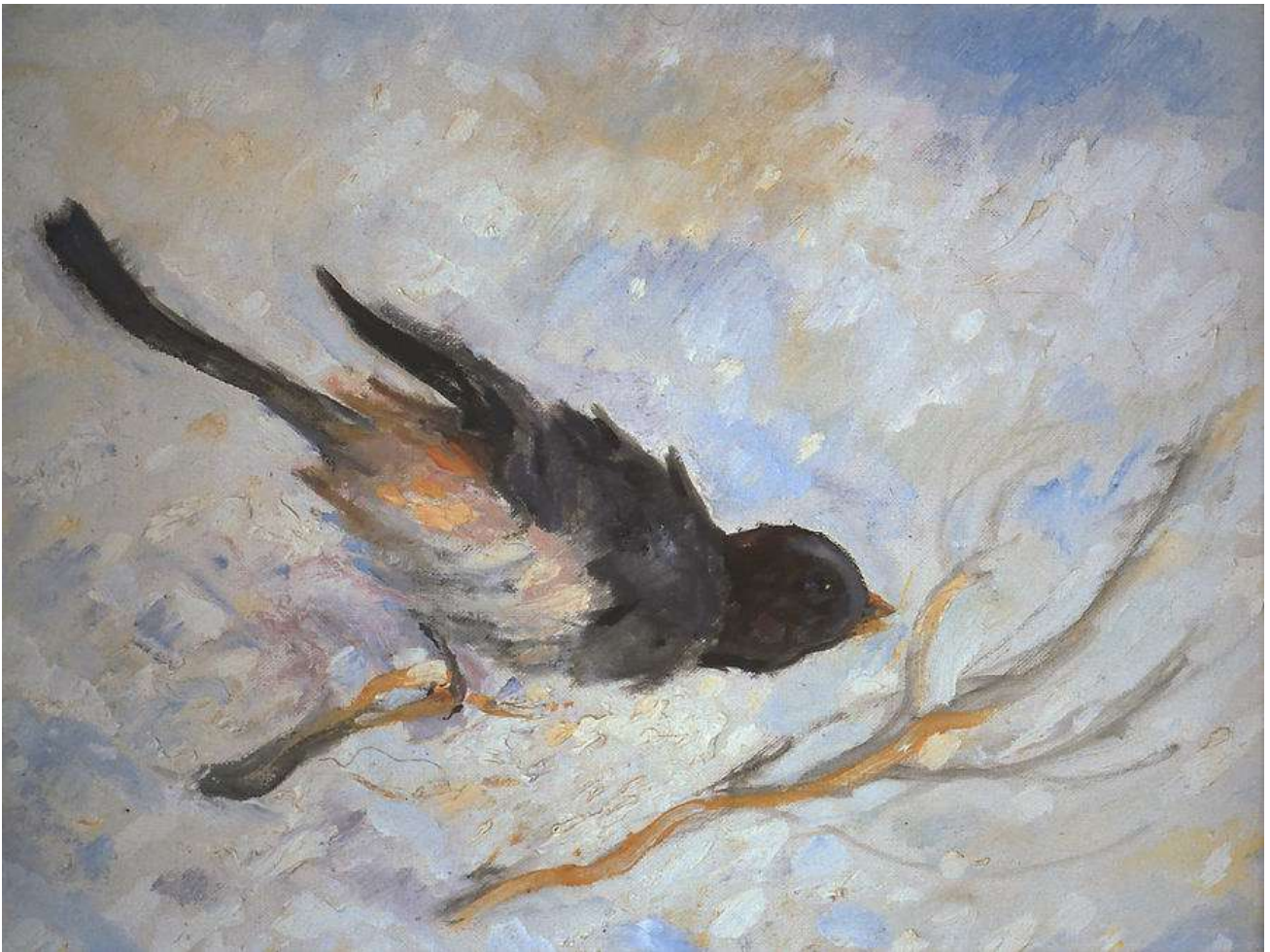

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 189

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 3761. 日記の編集完了:7バックの奇抜なフォーメーションに関する夢
- 3762. 音の創出の淀み
- 3763. 生活環境の恩恵
- 3764. 今朝方の夢
- 3765. 大型客船の上から星空を眺める夢
- 3766. 日記と作曲の新たな意味:シュタイナーの色彩論より
- 3767. 光の恩恵と光の形象化
- 3768. 人間であることの限界に対する葛藤
- 3769. 夢の再想起
- 3770. 霊性・死・音楽の探究
- 3771. 曲中の重力と多調の検証
- 3772. 自我の狡猾な行為
- 3773. 創造の源と創造の原理
- 3774. スーパーでの強盗事件と大学時代の自宅に関する夢
- 3775. バス釣りのトーナメントに参戦する夢
- 3776. サブドミナントマイナーとセカンダリドミナント
- 3777. 閉じられるドア・開かれるドア:死の先取りとしての夢及び音楽体験
- 3778. 言葉の発見・獲得としての理論学習
- 3779. 狒犬になることから始まった今朝方の夢
- 3780. 万物が創造される基底を守ること:本当に偉大だった私の先生たち

時刻は午前九時半を回り、穏やかな土曜日の雰囲気は辺りに漂っている。つい先ほど、無事に未編集の日記の編集が全て完了した。数日前までは、下手をすると編集は三月までかかるのではないかと思っていたが、突然編集の要領を得て、そこからはかなり驚異的なペースで編集を進めることができた。先ほどをもって、未編集の日記がなくなった。

気がつけば、3700以上の日記を書き留めていたようである。依然としてその数は微々たるものだが、たとえ微々たる量であったとしても、そうした積み重ねをしてきたことを認めることはできる。

これまではよく、旅をする際に過去の日記の編集をしてきた。旅に出かける時ぐらいしか編集をする時間がなかったこともあり、その結果として、ひと月前までは膨大な量の未編集日記が溜まっていたように思う。そこから私は毎日、少しずつ日記の編集を進めていき、ある時突如として編集のコツを掴み、一気に一気に編集を行うことができた。一度未編集の日記が溜まると厄介だということがわかったので、これからは未編集の日記が溜まっていかに、こまめに編集を行っていく仕組みを作った。

玲瓏たる水脈が流れているかのような冬の朝の光景が目の前に広がっている。赤レンガの家々の屋根には、もうほとんど雪は残っておらず、あまり日が当たらない屋根の部分に少しだけ雪が残っている程度だ。

早朝より、小鳥の鳴き声が聞こえる。こうした寒さにあっても、小鳥たちは元気なものである。彼らの声に耳を傾けていると、自分の内側に喚起される感覚があり、それは私の活動エネルギーに転換されていく。どうやら、小鳥の鳴き声にはエネルギーが凝縮されており、それに耳を傾けると、彼らの鳴き声からエネルギーを共有してもらえよう。その恩恵を受けながら、これから昼食までの仕事に取り掛かりたい。今日は昼食後に、一件ほどオンラインミーティングがある。それに向けての準備を今から少しばかり行いたい。

起床してから三時間以上経ったが、今朝方の夢についてふと思い出した。起床直後はほとんど夢を思い出すことができなかったのだが、今突如として夢の断片を思い出した。

夢の中で私は、小学校時代に通っていたサッカースクールの練習場にいた。夢の中の私は、成人の体をしており、どうやら今から行われる日本代表の試合に私も参加するようだった。相手はどこの国かわからなかったが、中東か南米の国のようだった。こちらのチームの監督が、「今日は一風変わったフォーメーションで行く」と述べた。どう一風変わっているのか興味深く思った私は、監督の話に耳を傾けた。どうやら、今日の試合は、7バックのフォーメーションで行くらしい。

ディフェンスラインに7人の選手が並ぶというのは、これまで見たことがなかった。そして、私のポジションは、7人のディフェンスラインの一番右とのことであった。このポジションはサイドライン間際に位置しており、どうやら守備よりも攻撃がメインのポジションのようだった。こちらの選手たちは、この奇抜なフォーメーションに対してそれほど驚くことなく、納得の表情を浮かべていた。

いざ試合が始まってみると、このフォーメーションは驚くほど機能していた。試合開始からしばらくしたところで、コートが一番右からライン際を駆け上がり、ちょうど中に入っていたところで私にボールが来て、それをシュートしたら見事にゴールに決まった。その後も、この奇妙なフォーメーションは機能し続けており、着実に得点を重ねつつ、結局無失点で試合を終えた。フローニンゲン:2019/2/2(土)10:01

No.1637: A Small Life

A piece of music is a small life that is very precious. I thought so in the early morning. Groningen, 09:13, Sunday, 2/3/2019

3762. 音の創出の淀み

時刻は午後の五時半を迎えた。二月最初の週の土曜日が終わりに向かっている。

今日は一日を通して穏やかであり、雨も雪も降らなかった。とはいえ、晴天だったわけでもなく、一日中薄い雲が空を覆っていた。

午前中に、小鳥たちが鳴き声を上げており、その声に耳を澄ませていたのを思い出した。不思議なもので、小鳥たちは午前中には鳴き声を上げるが、午後以降は鳴き声を上げることなくひっそりとしている。鳥たちにも固有の生活リズムがあるようだ。

午前中の早い時間に、過去の日記の編集が終わったため、ここからは再び作曲理論と音楽理論の学習に多くの時間を充てることができる。そもそもここ最近、過去の日記の編集に時間を充てていたため、読書そのものの時間が減っていた。

午後に作曲実践をする中で、理論を学ぶ重要性を改めて実感していた。夕方に曲を作っていると、どうも創造エネルギーがそれほど湧いてこず、曲を作っていく足取りが重かった。改めて、美しい曲を自由自在に作っていくことの難しさを痛感する。こうした時こそ基本に立ち返ることが重要だろう。基本とは言うまでもなく、理論である。理論をしっかり学ぶことが、創造活動の揺るぎない足腰になっていく。

音をうまく生み出すことができない状況というのは、どこか言葉をうまく紡ぎ出すことが難しい状況と似ている。文章を書く際にも、すらすらと言葉が生まれてくることがある一方で、なかなか言葉が生まれてこない状況を誰しも経験したことがあるだろう。音楽の創出においても全く同じだということが改めてわかる。夕方に音がうまく生まれてこなかったことは、決しておかしいことではなく、自然なことなのだろう。

言葉の創出にも波があり、音楽の創出にも波がある。そうした波の揺れ幅を減少させていき、安定的に言葉と音楽を生み出していけるようにしていくためには、絶え間ない学習と実践が必要になるだろう。とりわけ音楽の創出に関しては、自らにより多くの学習と実践を課したいと思う。それを望んでいる自分がいるのであるから、その自分の望むようにする。

夕食を摂ってからは、メロディーに焦点を当てた“Melody Writing and Analysis (1960)”を読み返し、音楽理論に関するテキストを読み返していこうと思う。その際には、自分が関心を持つトピックを中心に読んでいく。こうした書籍を読む際に、字面を追いかけていては全く意味がなく、次の実践に活かしたいと思う項目を一つでも多く得るという意識を持って書籍を読んでいく。あるいは、今抱えている課題と照らし合わせて、それらの課題を解決する観点を得るように意識して読んでいく。そうした能動的な意識を持った学習を明日からもまた継続させていきたい。フローニンゲン:2019/2/2 (土)17:49

Clouds disapproved now, and the sky is painted with blue. I'll go for a walk in the afternoon.

Groningen, 11:54, Sunday, 2/3/2019

3763. 生活環境の恩恵

時刻は午後七時半を迎えた。つい先ほど夕食を摂り終えた。

自宅近郊のこの落ち着き、そして静かさに改めて感謝の念を持つ。こうした平穏かつ静寂な環境の中にいるおかげで、私は日々の諸々の活動に打ち込むことができているのだと思う。

日々の活動を妨げる煩わしいことが一切ないこうした環境に改めて感謝をすると共に、今後いかなる国に住むことになったとしても、こうした落ち着きのある環境で生活を営んでいこうと思う。どのような場所に住むかというのは、日々の生活の質、さらには人生の質に大きな影響を与えるのだから。

今日は音楽理論に関する学習とメロディーに関する学習を少しばかり進めることができた。それぞれ一冊ずつ専門書を改めて読み返しており、こうした学習の意義を改めて実感する。発達理論の奥深さと同様に、音楽理論の世界も実に奥深い。仮に過去に読んだことのある書籍であっても、再読時に新たな気づきや発見が得られることから、それらの領域の奥の深さがわかる。

それらの領域を学習していくことに終わりはないのだから、毎日少しずつ理解を深めていこうと思う。今日はこれから、モーツァルトに範を求めて一曲ほど作る。その際は、とても短い変奏曲を参考にし、同主調への転調を実験してみようと思う。これまで転調を活用する際には、下屬調や属調に転調することが多く、たまに平行調に転調するぐらいであった。つまり、これまでの作曲実践においては、同主調への転調は滅多に行われていなかったのである。

晩年のピカソがかつて、「今になっても、私の毎回の作品は実験の産物である」というようなことを述べていたことを思い出す。あれほどの境地に至ったピカソですらも、画家としての最後を迎えるまで、絶えず実験を行っていたのである。それを思うと、私が毎日実験を繰り返していることはおかしいことではなく、むしろそれが自然なものであることがわかる。作曲実践において実験をしなくなれば、

それは作曲技術をより高みに至らしめる道を諦めたことを意味するだろう。とにかく毎回の作曲実践においては、仮説を基にした実験を行い、その結果を次の実践につなげていく。

今夜はおそらく、作曲実践をした後に書籍を読むことはないだろう。そのため、明日の学習計画について少しばかり書き留めておくと、明日はマックス・レーガーの“Modulation (2007)”を読み返そうと思う。これはタイトル通り、転調に関する理論書である。60ページほどの非常に薄い書籍だが、具体例が豊富に掲載されており、転調を学習するには非常に有益な書籍だ。明日は再び最初から読み始め、一つ一つの具体例をゆっくりと学習していく。今回は、一字一句ゆっくりと読み進めていき、一つ一つの記号の意味も理解しながら読み進めていく。

この書籍以外には、バルトークの作曲技術を解説した“Bela Bartok: An Analysis of His Music (2000)”を再び読み返そうと思う。良書は何度も繰り返し読み、毎回の読書から一つでも新しい観点を得て、それを次の作曲実践に活かしていく。

私には作曲上の物理的な師はいないが、過去の偉大な作曲家が残した楽譜、さらには音楽理論家が執筆した優れた理論書が常に自分のそばにある。それらを師とみなしながら、音楽理論に関する理解を深め、作曲技術を向上させていく。いつかそれらの師を超える日がやってくるだろうか。その日を楽しみに日々精進する。フローニンゲン:2019/2/2(土) 19:54

No.1639: Vital Power of the Sun

It has been beautifully sunny today. When I went out in the afternoon, I received the vital power from the sun. Groningen, 16:38, Sunday, 2/3/2019

3764. 今朝方の夢

今朝はいつもよりゆったりと、七時に起床した。七時半を迎える頃には、ゆっくりと辺りが明るくなり始めている。今、フローニンゲン上空の空はダークブルーに変わり始めており、日の出の時間が早くなったことを実感する。今日は幸いにも晴れのようなので、朝日を拝むことができるだろう。

いつものように、今朝方の夢を振り返っておきたい。夢の中で私は、家族と一緒に旅行に出かけていた。

辺りの景色や雰囲気から察するに、日本のどこか風光明媚な場所を訪れているようだ。その日に宿泊する予定の旅館に到着し、早速シャワーを浴びることにした。

備え付けのシャンプーを使って随分と泡立てた後に気づいたが、自分でもシャンプーを持ってきていたことに気づき、一度洗い流してからそれを使おうと思った。ところが私は、頭の上に泡立ったシャンプーを流すことなく、一旦風呂場から出て、父に声をかけてシャンプーを持ってきてもらうことにした。父はしばらくシャンプーを探してくれたが、結局見つからず、私が代わりに探すことにした。私は言い間違えて、「自分のシャンプー」と父に述べていたが、実際には父のシャンプー借りるつもりであった。そのため、父のカバンの近くに置いてあったシャンプーを借りて、再び風呂場に戻った。そこで少しばかり夢の場面が変わった。

次の夢の場面も同じ旅館が舞台となっていた。だが、そこにはもう家族はおらず、私は友人と一緒にその旅館に宿泊しているようであった。

どうやらその日は出発前日のようであり、今日の夕食と明日の朝食を近くのスーパーで購入することにした。しかし、旅館の近くにはスーパーが無く、仕方なくコンビニに立ち寄った。そこで私はサンドイッチの詰め合わせと大きなサラダを購入しようと思った。今日の夕食はサラダだけにし、明日の朝食にサンドイッチでも食べようかと考えていた。すると一緒にコンビニに来ていた友人が、美味しそうな和食弁当を見つけた。その中身を見ていると、私も食べたくなってきてしまい、それを購入して、今日の夜に食べることにした。レジに品を持っていくと、ちょうど店員がレジの後ろで水を飲んでいた。グラスコップには、新鮮そうな水が入っており、それは幾分輝いて見えた。店員がそのコップを置き、会計の対応をし始めたところで、私は手に持っていたカップを店員に差し出した。

私:「ごちそうさまでした。おいしかったです」

店員:「ありがとうございます」

どうやら私は、コンビニの中でコーヒーを飲んでいただようであり、それを飲むために使っていたコップを返却した。今回購入した食べ物の値段が極めて安いことに驚きながら、クレジットカードを財布から出したところで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/2/3(日)07:55

I could continue to see the sunshine today. By virtue of it, I was able to feel that lights of awareness were amplified. Groningen, 21:19, Sunday, 2/3/2019

3765. 大型客船の上から星空を眺める夢

時刻は午前八時を迎え、辺りはすっかりと明るくなった。天気予報の通り、今日はほとんど雲がなく、心地よい晴れの日これからなっていくだろうと予感させてくれる。私の家からはまだ日の出が見えないが、もうそろそろしたらそれを拝むことができそうだ。

先ほど今朝方の夢について振り返っていたが、そこからさらに別の夢を思い出した。こちらの記憶は断片的なものになってしまっているが、覚えている限りのことを書き留めておきたい。

夢の中で私は、体育館のような場所にいた。だが、よくよく周りを見渡してみると、それは体育館というよりも、大型客船のフロアの一つであることがわかった。

私はなぜ自分が船の中にいるのかわからなかったが、大海をゆつくりと進む船の上で過ごせることを嬉しく思った。その大型客船の中をあれこれ散策していると、またしても体育館のフロアのような場所にやってきた。

今度はその二階に上がってみると、一つ一つの窓にカーテンレースが取り付けられていることに気づいた。どういうわけか私は、窓の外に取り付けられている小さな通路の方に出てみようと思った。しばらく通路を歩いていると、一つの窓の近くに二人の男女がいることに気づいた。見ると、一人は小中高時代の幼馴染みの女性の友人(MH)であり、もう一人の男性は白人であった。

二人が何か大切な話をしているように思えたので、私は二人に軽く会釈をし、特に声をかけることなくその場を後にした。しばらく窓の外の通路を歩いていると、私を呼ぶ声がした。その声は、私よりも高い位置から聞こえてきた。上を見ると、この体育館のような施設には二階のみならず、三階があるらしく、そこに私の小中学校時代の友人(HS)がいた。彼は嬉しそうに手を振りながら、こっちに来るように呼びかけている。彼のいる三階に上がってみると、そこは非常に狭い空間であったが、上空

には星空が広がっていた。友人は持参したワインをその場でグラスに注いでくれ、二人で乾杯をした。ワインを飲み干した後、私たちはその場に寝転んで、満天の星空を眺めていた。

今朝はそのような夢も見ていた。夢はやはり書き出してみることによって、内容が思い出されることがある。今朝方見ていた夢の中には、自分の影がいくつか投影されていたように思う。それが何かを知っているのは自分だけであり、それは自分が気付いてさえいればいいので、あえてどのようなシャドーが投影されていたかについてはここに書かない。

それにしても、夢の中で船の上から見た星空は美しかった。星空を眺めたのは短い時間であったが、感動の感覚が自分の内側に残っている。また、今回の夢の舞台は大型客船の上であり、これまではあまりこうした場面設定に出くわすことはなかったように思う。以前より、大型客船に乗って世界を旅することを考えており、その実現が迫ってきているのかもしれないと思う。

今、目の前には淡いブルーの空が広がっており、白い雲に太陽の光が反射して薄いピンク色になっている。一羽のカモメが大空を羽ばたいていった。カモメが飛び去るのを見届けたため、これから一日の活動を本格的に始めていきたい。フローニンゲン:2019/2/3(日)08:27

No.1641: Directions of Tomorrow

The morning glow is exquisite, which appears to be light reddish purple in color. A flock of seagulls are flying in the sky with joy. Groningen, 08:17, Monday, 2/4/2019

3766. 日記と作曲の新たな意味:シュタイナーの色彩論より

時刻は午前10時を迎えた。空に少しばかり雲が現れ始めたが、それでも晴れていることに変わりはない。

もし午後も天気が良いければ、散歩をしに行こうかと思う。このところは寒さが厳しいため、本格的にランニングをすることはなく、近所のスーパーに行く際に軽く走る程度にしている。そうしたこともあり、今日のように天気が良く、気温も低くない時には気分転換に散歩に出かけるのも良いだろう。その際には少しランニングも行おうと思う。

早朝に、モーツァルトに範を求めて一曲作った。改めて、モーツァルトから学ぶことは多く、特にリズムとメロディーから学ぶことは多い。

昨夜考えていたように、今朝の作曲実践では、同主調への転調を実験してみた。思っていた以上に、その響きが良く、曲の表情がうまく変わったように思った。そのため、これからモーツァルトの変奏曲に範を求める時は、しばらく同主調への転調を実験してみようと思う。

ゴッホが過去の偉大な画家の作品に範を求め、まずは模倣から入り、徐々に自分の絵画技術を獲得して行ったのと同じことを自らに課す。画家が良い絵画を数多く見て、それを元に実際に絵画を描きながら自らの技術を高めていくのと同じように、良い楽譜を数多く見て、それを参考にして曲を作っていく。それに並行して、良い楽譜から多くのことを得るための観点を獲得するために、理論書を読んでいく。それを今日も行っていく。

つい先ほど、シュタイナーが色について解説した“Colour (1992)”を読み返していた。改めて、シュタイナーの色彩論は興味深いと思い、得るものが多かった。特に、シュタイナーが、思考は光だと述べている箇所が非常に面白く思った。というのも、これまで私はよく意識空間内で光を知覚する体験をしてきており、どこことなく意識と光の間には何かしらの関係性があると思うようになっていたからだ。

シュタイナーは、意識空間内の思考は光そのものであるとも述べている。より具体的には、思考を外側から観察すると、そこに光を見出すことができるとシュタイナーは述べている。まさに自分の直接体験と照らし合わせてみると、光を知覚する体験の最中は、自分の思考を外側から眺めていたのかもしれないと思う。今私は目覚めた意識でこの文章を書いており、それはグロスの意識が優位な状態であり、言い換えると、肉体の眼が優位な状態である。

しかしながら、仮に心の眼を優位にしてみると——心の眼を活用してみると——、今考えている事柄、つまり思考そのものを眺めてみると、それは光のように見えなくもない。別の表現で言えば、今このようにして自分が考えていることを書き出しているが、このプロセスの最中にも光を見ることができるのだ。もしかすると、自分の思考を文章として綴っていくというのは、光の輪郭を辿っていくことなの

かもしれない。文章を書くというのは、光を書くことに他ならず、光をこの世界に文字という形にする実践のことを指すと言えるかもしれない。

おそらくこれは、文章を書くことだけに当てはまるのではなく、作曲においても当てはまるだろう。曲を作るというのは、まさに自分の内側の光の輪郭を辿り、それを形にしていっていったのだ。ここにまた、日記を執筆することと作曲することの新たな意味が見つかった。それらは共に、光を形にすることだったのだ。フローニンゲン:2019/2/3(日)10:18

No.1642: Handclaps

I'll eat lunch early today. I'll continue to read books about music in the afternoon. Groningen,
11:16, Monday, 2/4/2019

3767. 光の恩恵と光の形象化

時刻は午後の三時を迎えた。今日は本当に素晴らしい天気であり、仮眠を取り終えた後、つい先ほどランニングと散歩を兼ねて外出をしてきた。外に出てみると、太陽の光が燦然と降り注いでいるおかげか、それほど寒く感じることはなかった。まずは少しばかりランニングをして、近所の運河沿いのサイクリングロードを走ろうと思った。

運河に向かう道の途中で、ふと視線を左にやると、この三年間でまだ一度も通ったことのない道を見つけた。それは高速道路の下を通り抜け、反対側の住宅地に続く道であった。私はふと、まだ通ったことのない道の方へ向かって走って行った。そこには平穏な住宅地が広がっており、太陽の降り注ぐ方向へ足を進めていると、サッカーコートが何面もある場所を見つけた。

そして耳を澄ましてみると、遠くのコートからサッカーボールを蹴る音と人の声が聞こえてきた。そちらの方向に向けて走っていくと、どうやらアマチュアのサッカーチームが試合をしているようだった。どちらのチームもアマチュアであることは確かだが、お互いに真剣に試合をしていた。何人かの人たちがその試合をコート脇で観戦しており、私も彼らに混じってしばらく試合を見ていた。試合を観戦した後、再び来た道を軽くランニングしながら戻り、自宅近くの踏切付近からゆっくりと歩くことに

した。その頃にはもう随分と体が温まってきており、上に来ていたスポーツジャケットを脱ぐことにした。

改めて先ほどのランニングと散歩を振り返ってみると、随分と瞑想的な意識の中でそれを行っていたことに気づく。太陽の光から直接的な音が聞こえるわけではないのだが、心眼ならぬ心耳に意識を集中させると、太陽の光から音が聞こえるようであった。もしかしたら、そうした音こそがまさに、古代ギリシャ人たちが見出した「天体の音楽」と呼べるものなのかもしれない。今後は太陽の音、さらには月の音を聞くように意識を集中してみようと思う。

近所のスーパーにランニングがてら出かけることを除けば、今日は久しぶりに外に出かけたように思う。いかんせん、ここ数ヶ月間ずっと天気が悪いのだからそれも仕方ないと言えば仕方ないのだが、今後は晴れの日は短くてもいいので、ランニングと散歩を兼ねて外出しようと思う。それは30分程度でもいい。とにかく太陽の光を浴び、外の空気を吸うということを心がけたい。

今もまだ、空には雲が一切なく、空一面が青一色で塗られている光景が広がっている。

以前の日記で書き留めていたように、生命にとって太陽の存在がいかに大切かがわかる。光の恵みを受けることの幸せを、先ほどは存分に実感した。

そういえば、今朝方は、シュタイナーの光に関する洞察について言及していたように思う。それは、思考は光に他ならないというテーマであった。別の表現で言えば、気づきや内的感覚には、必ず光の要素が含まれているのだと思う。文章を書くこと、作曲をすること、絵を描くこと、それら諸々の創造行為は、内的な光が結晶化されたものだと考えることができそうだ。

ここでふと、私が長らく育った山口県光市について思いを馳せた。私は、光を司る街で長く育った。その意味が今突如として明らかになったように思った。私は、自分の内側で生起する光を形にしていく役割を担っているのかもしれない。

光の恩恵を絶えず受けながら、光を絶えず形にしていくこと。それを今後の人生において継続させていく。今日は太陽の光を浴びることができて本当に良かったと思う。フローニンゲン:2019/2/3
(日)15:16

As the weather forecast said, it started to snow, and then it began to rain. Groningen, 16:25,
Monday, 2/4/2019

3768. 人間であることの限界に対する葛藤

時刻は午後の八時半を迎えた。このように平穏で、それでいて充実した形で、そしてまるで水の流
れのような形で日々が進行していく。そのことに改めて驚かされている。

気がつけば、週末が始まり、気がつけば週末が終わりに向かっている。そして気がつけば、新たな週
が始まることに對して改めて驚く。一見すると永続的に思えるこのプロセスは一体なんなのだろうか。
それは天国での出来事のようにであり、同時にそれは人間に課せられた拷問であるかのように思え
る。

日々の連続的な流れを永続的なものだと思ってしまうことはおそらく錯覚であり、そもそも日々の流
れが連続的なものなのか否かを問う必要があるのだろうか。あるいは、そうした日々の流れを永続
的なものだと思わせる人間の構造的な特質に注意を向けるべきなのだろうか。今この瞬間に考えて
いるのはそのようなことだ。

今日も気がつけば、随分と雑多なことを書き留めておいた。私は一つ諦めていることがあり、それは何
かというと、絶えず日記を書くことによって何かに到達することや、何かを獲得することである。しかし
だからと言って、日記を書くことをやめるわけでは決してない。むしろ逆に、これからもよりいっそう日
記を書いていこう。

日記を執筆することは、最初から不毛な試みであり、この実践の不毛性に気づけた時に、新たな有
用性を見出したと言える。おそらく日記に対する認識の変容が生じたのであり、これからは新たな認
識を持って日記の執筆にあたっていく。それはまさに、日記の執筆は、内側で見出された光の形象
化であるという意味づけとして現れたのである。

今日は二冊ほどシュタイナーの書籍を読み返していた。それらの書籍を読み返しながら、認識上の
地図をより精緻なものにしていく試みに邁進することが馬鹿げた試みだということに対する認識がよ

り強くなっているように思った。私が伝統的な科学、ないしは伝統的な学術機関で教えられる事柄に接する態度が変容してきたのはその表れだろう。人間の発達とは、本当に目覚めのプロセスのようだ。

今は、過去に数年間見ていた長い夢から覚めたような感覚に包まれている。その夢から覚めた時、また新しく自分の人生が始まったことを知る。このプロセスもまた、冒頭で述べた日々の変遷と同じように終わりのないものである。人は夢を見て、その夢から覚めて再び新しい夢を見る。そして、気がつけばこの世から去っている。それは幾分皮肉な姿に思えるが、それが人間の不可避な性であるからしょうがない。それがいかに皮肉に思えたとしても、私たちは夢から完全に覚めることができる。

確かに、私たちは生きている限りは夢を見続け、何かしらの夢の世界に閉じ込められることになるのだが、究極的な覚めがやってくれば、夢を見ていることに自覚的になることができ、夢の世界に閉じ込められていることに気づくことができるようになる。おそらく人間の解放は、そこにあるのだろう。

残念ながら私たちは、いかなるものからも完全には解放されえない。それが人間の条件だ。だが、完全に解放されえないことに自覚的になり、何が自己を制約しているのかに完全なまでに自覚的になることはできる。おそらくそれが、人間の解放の条件になるだろう。

つい先ほど、高度な発達段階の実存的な課題について考えていた。それは世間一般で言われるように、複雑な認識世界を獲得したがゆえに、その複雑性に押しつぶされてしまうということではない。確かにそれは比較的高度な発達段階に見られる課題だが、さらに発達が高度化してくると、そうした複雑な認識を生み出し得る人間存在そのものの特質、より具体的には、そうした複雑な認識を生み出しうる思考や言語の内在的な特性そのものに対して葛藤を覚えるようになるだろう。

端的には、人間であることの限界に苦悩すると言い換えることができるだろう。高度な発達段階の人たちが複雑な認識世界に押しつぶされてしまうという説明は不十分であり、むしろそれは比較的高度な発達段階で抱える程度の葛藤に過ぎない。より発達が高度化すると、人間存在が内在的に抱える種々の制約と限界そのものに対して、そしてそれを抱えることが不可避であり、逃げようもないことに対して実存的な葛藤を覚えるのだろう。フローニンゲン:2019/2/3(日)20:47

今朝は六時前に起床し、六時半から一日の活動を始めた。今日から新たな週を迎える。二月に入ってから、さらに寒さが厳しくなるかと思っていたが、ここ数日間は寒さが和らいでおり、今週もそのような週となるようだ。ただし今日は、午後からみぞれ混じりの雨が降るようだ。

今週の天気はそれほど優れないが、寒さがそれほどではないというのは朗報だ。去年は三月の初旬に気温がマイナスになる日もあったので、おそらく今は冬の中休みなのだろう。

普段通り、今朝方の夢について思い出している。起床してすぐに夢を思い出そうとしてみたところ、それほど夢の内容を覚えていないことに気づき、その後何とか夢を思い出そうとしてみたが、あまり思い出すことができなかった。

今のところ覚えているのは、夢の中でクイズが何かに答えており、他の人の回答が面白く、その場が笑いに包まれていたような場面だけである。どのような人がその場にいたのかは覚えておらず、今朝方の夢の登場人物の印象はとても薄い。

ここ数日のうちで、何度か夢の記憶が曖昧になっていることがあった。ただし、夢を思い出そうとしてみる試みや、夢を少しでも書き出してみることによって、徐々に夢を思い出すことができた。今日もそのようなことが起こることを期待しながら、とりわけ早朝の時間帯は、今朝方の夢について思い出そうにしたい。

ジョン・エフ・ケネディ大学時代に、夢に関するコースを受講していた時に、夢というのは想起しようとすればするほどに、想起力が高まるということを体験を持って学んだ。その教えにあるように、今後あまり記憶に残っていない夢に対しては、できるだけ再想起するようにしたい。

今、そのように書き留めた瞬間に、今朝方の他の夢の場면을思い出した。本当に再想起が起こったことに驚くが、やはり夢は認識の光を当てると、それに応えてくれるかのように再び顔を出してくれるものなのかもしれない。夢の中で私は、実際に通っていた中学校のグラウンドにいた。グラウンドで、何人かの友人たちとサッカーをして遊んでいた。それは試合形式ではなく、コーナーキックを蹴っ

て、それに合わせる遊びであった。私がキッカーを務めており、左のコーナーから、右足で巻くようなボールを何度か上げることを行っていた。

途中で右のコーナーからも蹴ろうかと思ったが、右足で蹴ると、ゴールから逸れていく方向にカーブがかかるため、今回は左のコーナーだけからボールを蹴ることにした。コーナーキックを蹴る遊びの前に、そういえば、一人の友人とシュート練習をしていたことを思い出した。

少しばかり遠い距離から、ほぼ直線的な強いシュートを打つ練習であった。いやそれは練習というよりも、それもまた遊びの一環であった。そのような場面を挟み、コーナーキックを蹴る遊びがひと段落すると、私は教室に戻ろうと思った。その前に、二人の友人(TK&YU)とリフティングをしながら、ボールを落とさずに靴箱まで箱でいく遊びに興じていたのを覚えている。

靴箱までやってくると、誰がボールを教室まで運ぶかを話し合った。友人の一人が親切にもボールを教室まで持って行ってくれるとのことであり、私は階段を上ったところにある水道で手を洗った。授業の開始時間が迫ってきており、ボールを教室に持って帰った友人は、手を洗う時間がないようであり、私はそれを随分不衛生だと思った。そのような夢を見ていたことを突然思い出した。フローニンゲン:2019/2/4(月)06:47

No.1644: A Puddle

My tiny ego is dipping its foot in a puddle, which looks ludicrous. Groningen, 21:02, Monday, 2/4/2019

3770. 霊性・死・音楽の探究

時刻は午前七時を迎えようとしている。今日もこれからゆつくりと夜が明け、一日が静かに始まっていくだろう。

今日からは四日連続でオンラインミーティングが入っている。それぞれ異なる協働者の方々とのミーティングであり、年度末に向けて、今年度のプロジェクトの諸々が佳境に入っている。一方で、来年度に向けた準備のためのミーティングもあり、ここでもまた、終わるものと始まるものについて考えさ

せられる。プロジェクト一つをとってみても、それはまるで生命のようであり、停滞や発達を経験しながら巣立っていく。そのようなことを思うと、どこか感慨深い思いに駆られる。

一昨日に、霊性と死という現象を深く探究していこうという気持ちを改めて持った。仮に博士号を取得するのであれば、テーマはそれらになるだろう。むしろ、それ以外のテーマは、私にとって数年をかけて博士論文を書くほどのテーマではないと思われるようになった。それらのテーマを扱うための準備が必要であり、それは知識的なものというよりも、内面の成熟に関するものだ。

数年後、ないしは10年後、あるいはそれよりも少し後になってから、霊性と死に関する探究をするために博士課程に進学している可能性が大いにある。霊性と死には、究極的な真実が隠されており、それを探究することに人生の半ばから後半の時間を充てていくことになりそうだ。そのような予感がある。

今日はこれから、早朝の作曲実践を行いたい。ここ最近では、最初と最後の作曲実践を、モーツァルトの曲を参考にして行うようになっている。ここ数日間では、同主調への転調を試している。改めて、同主調へ転調することによって、曲の表情が変わることを面白く思っている。

今は幾分強引な形で同主調へ転調をしているのだが、それほど大きな違和感を感じさせないのは、それが同主調への転調だからなのだろう。一方で、違和感をあまり感じさせないながらも、工夫をすれば、より滑らかな転調ができそうだという感覚もある。同主調への転調の場合にいかなる工夫を施せばいいのかをこれから探っていきたい。

本日これから行う早朝の作曲実践では、あえて調号のない楽譜を用いることによって、それぞれの調のどの音に変化記号(シャープやフラットなど)が付くのかを確認しながら作曲をしていく。

調号のない楽譜は、まさに無色のパレットのようであり、今後転調を駆使するような曲を作る際には、そうした調号のない楽譜を活用した方がいいのかもしれない。もちろん、作曲ソフト上では簡単に調を切り替えることができるのだが、自分の学習のためを思うと、調号が付いた楽譜を用いる方がいいのか、それとも調号の付いていない楽譜を用いる方がいいのか悩むところだ。その点に関しても、どちらがいいのか、あるいはそれは時と場合によって使い分けていくことが賢明なのも含めて、いろいろと試行錯誤をしていこうと思う。

モーツァルトの曲に範を求めたら、今日も旺盛に作曲理論と音楽理論に関する書籍を読み進めていく。メロディーに関しては、“Melody Writing and Analysis (1960)”を読み進め、転調に関しては、マックス・レーガーの“Modulation (2007)”を読み進めていく。さらには、こうした技術的な専門書を読むことに加えて、ルドルフ・シュタイナーが音楽について論じた“Music: Mystery, Art and the Human Being (2016)”の再読を進めていこうと思う。思うに、現段階で音楽に関する探究を積極的に進めているのは、それが霊性と死の探究をしていくための準備となり、音楽の探究が霊性と死の探究と密接に関係しているからなのだろう。フローニンゲン:2019/2/4(月)07:16

No.1645: Fog & Joy

It is foggy this morning. Yet, I can find joy in the fog. Groningen, 08:35, Tuesday, 2/5/2019

3771. 曲中の重力と多調の検証

時刻は午前十時半を迎えた。今から昼食前の作曲実践を行い、その後、午後からのオンラインミーティングに向けて準備をしたい。

今朝は、朝焼けがとても美しかった。それは薄赤紫色に輝いており、幻想的な色を醸し出す空の下を無数のカモメたちが嬉しそうに舞っていた。薄赤紫色の空を背景に、カモメたちが一斉に飛び立つ様は圧巻であった。そのような景色を拝めたことを有り難く思う。今は薄い雲が空を覆っており、天気予報通りになるのであれば、午後からはみぞれ混じりの雨が降るだろう。

先ほど、シュタイナーが音楽について解説した“Music: Mystery, Art and the Human Being (2016)”を少しばかり読み進めていた。その中で、魂の涵養が進むと夢がより明瞭なものになるという記述に目が止まった。

昨年のある時を境とし、突如として私の中で夢の世界が拡張されるような体験があり、それ以降は、夢を想起する力がこれまでとは違う次元に到達したように感じている。もしかすると、昨年のそのタイミングをきっかけとして、自分の魂がまた一つ深い次元に成長を遂げたのかもしれないと思う。そうでなければ、日々の夢の世界がこれほどまでに豊かになり、より明瞭なものになっていることの説明が付きづらい。午後からも引き続き本書を読み進めていこうと思う。

午前中にはその他にも、“Melody Writing and Analysis (1960)”を読み進めていた。その中にも興味深い観点があり、それは、曲の前半は重力が上がるかのようにシャープ系になることが多く、後半はフラット系になることが多いというものである。

ちょうど早朝の作曲実践では、シャープ系の調からフラット系の調に重力が落ちるような形で転調を適用したところだった。また、それとは逆向きの転調を今夜試してみようと思っていたところだったので、その記述に出会ったのは偶然であった。

以前の日記で書き留めていたように、調というのは曲における色であるのと同時に、それは固有の重力(ないしは重力場)であるとも言える。各調には固有の重力場があり、どの調からどの調に移行するかによって曲の表情が変わったり、ある調からある調への転調はスムーズなのに対して、ある調からある調への転調が難しいことがあったりするの、こうした重力の影響だろう。

今夜の作曲実践では、今朝とは逆向きの重力の移動を転調によって実現させると、どのような効果が得られるのかを検証していく。それに加えて、可能であれば、多調の曲を作ってみようと思う。例えば、ベース部分はフラット系の調を塗り、ソプラノ部分はシャープ系の調で塗ってみるという実験をしてみる。その際の響きはいかほどかを確かめていく。

多調の曲を作ってみようと思うことはこれまでもあったのだが、結局作らずじまいであった。そのため、今夜再びモーツァルトに範を求めて作曲実践をする際には、早朝とは逆向きの重力移動を試すのと、多調を試してみたいと思う。重力の検証をするという観点においては、上下にあまり異なる調を組み合わせることは賢明ではないと思うので、ソプラノとベース部分に関しては隣接調を用いるようにしてみよう。フローニンゲン:2019/2/4(月)10:44

No.1646: Everyday Returning to the Flow of Time

Everyday is crystalized, and it dissolves and returns to the flow of time. Groningen, 11:09,
Tuesday, 2/5/2019

3772. 自我の狡猾な行為

時刻はゆっくりと午後の六時に近づきつつある。外の世界は徐々に闇の世界に向かっている。

気がつけば、随分と日が伸びたものである。五時半を過ぎてもまだ完全な闇ではないところまで日が伸びた。

街灯の明かりが灯り始めた時刻を迎えた今は、小雨が降っている。天気予報の通り、午後から粉雪が降り始め、それは雨に変わった。

今日は昼食後にオンラインミーティングを行い、残りの時間は、発達理論に関する論文を一つ読み、作曲理論や音楽の思想的側面に関する書籍を読んでいた。人間発達の探究と音楽の探究が密接不可分のものとなった。また、音楽を探究することが、霊性と死生観と強く関連したものであることに気づき始めている。

音楽に関する探究をしていく際には、当然ながら作曲技術をより磨き、より豊かなものにしていくために、作曲理論や音楽理論などの技術的な事柄に関する書物を読んでいく。しかしそれだけでは不十分であり、本日読んでいたように、音楽に関する思想的な書物も合わせて読み進めていく。

兎にも角にも、作曲実践において、技術と思想の双方が重要である。そして、とりわけ音楽や作曲に関する思想的な側面の書物を読んでいく際には、それらの内容と霊性や死という現象に関連付けていく。そのような形でこれからの探究は進んでいく。

今日は偶然ながら、知人の方から久しぶりにメールをいただいた。その方は昨年からはブログを書き始めたようであり、その連絡を本日受けた。早速拝見してみたところ、いくつか興味深いことが書かれていた。その方と私に共通しているのは、ヨガの実践者であることだ。その方のブログの中で、ヨガの探究とは究極的には書くことと話すことであると書かれており、その点に多いに賛同するものがあった。

夕方、少しばかり、狡猾な自我の性質について考えを巡らせていた。チョギャム・トウルンパ・リンポチェが指摘するように、私たちの自我は、自らの永続性を保存しようという強い欲求の元、あらゆるものを物質化し、それを消費する中で自己の永続性を保存しようと努める。そこでは、霊性というものも消費対象に成り下がり、それを消費する形で自己保存を果たそうと躍起になる。言い換えると、それは自我の防衛反応であり、自我は自己保存をするために、あらゆる対象を道具化し、それを用いて自己保存の目的を果たそうとする。

自己保存を果たすための自我の狡猾な行為は、全てを物質化・道具化し、しかもそれを自己に悟られない形で行っていることだろう。自我のこうした狡猾な行為に無自覚であり、あらゆる対象を物質化・道具化し、自我の思うままに対象を消費している様子は、この現代社会において至る所で見受けられる。そのようなことを考えていた。フローニンゲン:2019/2/4(月)18:05

No.1647: A Primitive Drum

A primitive drum is producing a rhythmical sound and a gentle melody. Groningen, 17:43,
Tuesday, 2/5/2019

3773. 創造の源と創造の原理

つい今しがた夕食を摂り終えた。時刻は午後の七時半を迎え、これから就寝までの時間を再び読書と作曲実践に充てていきたい。

夕食前にふと、私たちは音楽を聴くとき、さらには音楽を創造するときに至福さを覚える、というシュタイナーの指摘を思い返していた。まさに過去の偉大な作曲家が創造した曲を聴くときの至福さと、自ら曲を創造したときの至福さの二つが存在していることは、これまでの自分の体験を通じて明らかであった。

今はエマニュエル・シャブリエのピアノ曲を聴いている。シャブリエの作品群を聴く至福さの中で、これから読書を行っていこうと思う。その前にもう少しだけシュタイナーの指摘について触れておきたい。ここからは、どのような小さな作品でもいいので、絶えず音楽を創造する至福さの中で日々を過ごしていこうと思う。それは確かに、自我が至福さを求めようとする特性の表れかもしれないが、爆発的な至福さの中で自我を溶解させていく試みに従事していく。

ここ最近、ふとした時に、音楽が創造される源なるものが存在していることに気づき始めている。それは音楽を創造する根源的な世界であり、それは多分に、私という個人の中に広がる無限の無意識の領域のようであり、同時にそれは集合的な無意識の領域であるように思える。はたまた、そうした個人的・集合的な無意識すらも超越したものなのかもしれない。いずれにせよ、音楽を生み出

す源と究極的な一体化が果たされるまで曲を作り続けていく。そこに向けて日々の一つ一つの実践がある。

夕食を摂りながら、これまでは遠慮がちにごくわずかな数の曲しか一日に作ってこなかったことについて考えていた。確かに私は、専業の作曲家ではないし、ましてや作曲を仕事にしている者ではない。その他の仕事や実践を持っているのが自分の今の姿だ。しかし仮にそうだとしても、一日に三曲や四曲しか作らないというのは全くもって怠慢なのではないかと思い始めている。

自分がなぜそのような微量の曲しか毎日作っていないのかというと、それは参考にする曲が枯渇してしまうことに対する懸念があったのだと思う。おそらく手元には、数千ほどの曲を生み出し得るほどの楽譜がある。しかし、数千という数が極めて少ないことを懸念している自分がどこかにいたようであり、仮にそれらを全て参考にした後に、自分はどうやって作曲をしていったらいいのかわからないという懸念があったようだ。しかし、別に一つの曲を一度だけしか参考にしてはならないという決まり事などないのだ。

良書というものは繰り返し読めば読むだけ、新たな気づきと発見を私たちにもたらししてくれるように、曲に関しても同じく、自分を捉えて止まない曲は何度も参考にするべきなのである。自己が深まり、および自分の作曲技術が深まれば、次回同じ曲を参考にした際には、必ず新しい曲が創造されているはずだ。それは曲という創造物の原理であり、人間発達の原理でもある。

私たちは、二度と同じ川に足を踏み入れることはできない。その教え、そしてその事実、そっくりそのまま作曲実践にも当てはまる。

確かに現段階では諸々の制約があるが、面白そうだった曲を手当たり次第に参考にしていこう。自分に響くものがある曲は一つ残さず逐一参考にしていく。そして、数千の曲を一回りし、何度も同じ作品を参考にしていくという姿勢を持とうと思う。今夜からの作曲実践の楽しみがまた一段深まったように思う。楽しみもまた深まりを見せるものなのだ。フローニンゲン:2019/2/4(月)19:47

3774. スーパーでの強盗事件と大学時代の自宅に関する夢

今朝は六時過ぎに起床し、六時半から一日の活動を始めた。幸いにも、昨日の午後から降り続けていた雨は止んだようだ。今日は一日を通して雨が降ることはなく、どうやら曇りの天気となるようだ。

ここ数日間は、夢を見ていながらも、起床するとそれらに関する記憶が薄れてしまい、夢を書き出してみることによって夢を思い出すことが続いていた。一方、本日は比較的良好に夢を覚えている。

夢の中で私は、大学時代を過ごした街、東京国立市にいた。より厳密には、国立西の近辺を歩いていた。立川方面に向かう道を歩いている途中に当時よく足を運んでいたスーパーがある。そこで少し買い物をしようと思った私は、店に入り、店内で何気なく食品を選んでいく。

店内は比較的に混んでおり、平日の昼の時間にしては人が多いように思えた。すると突然、一人の男性が店内で叫び出した。その男性の手元を見ると、拳銃を持っていた。その場にいた客たちは静まり返り、その男性の言うがままに、地面に伏した。

スーパーで強盗が起きるというのは珍しく、最初私は何が起きているのかわからなかったが、男性が拳銃を天井に向けて突き上げている様子を見ると、それが正常ではないことにすぐに気づいた。

ちょうど私は出口付近で食品を選んでいくこともあり、また、入口も出口もドアが開いていたこともあり、男性の言う通りにおとなしくフロアでじっとしていなくても、出口から外に出て逃げようと思った。おそらく男性は、「身動きをするな」とこれから述べようと思っていたのだろうが、私はその言葉を聞くよりも先に、さっさと出口から外に出てしまった。その男性が私を追いかけてくるとは思えなかったが、一応スーパーからは走って逃げるようにした。

すると突然、私の身体は宙に浮き、電信柱の高さの1.5倍ほどの高さのところを飛んで移動することになった。飛ぶ速度は正直なところ、走る速度よりも遅く、それは飛ぶというよりも、空中で水泳をして移動するような格好になった。よりわかりやすく言えば、水中ではなく、空中をクロールの動きをし

ながら進んで行くことになったのである。男性が追いかけてくることはあまりないと思いながらも、私は一応必死に空中をクロールで進んでいった。

空中で息継ぎをする必要は全くないのだが、どういうわけか、息継ぎの動作まで交えながら空中を進んでいると、眼下に大学時代の友人(RT)がいるのがわかった。彼は上空を見上げ、私に声をかけた。もちろん、「そんなところで何をしているの？」という声かけだった。私は泳ぎの動作をいったん止め、上空から事情を話した。

私たちはそこで少しばかり話をし、やはり私は早く自宅に戻りたいという思いがあり、そこからまた泳ぎの動作で空中を進んでいった。自宅まであと100mほどになった時、疲労からか、クロールの動きの速度が一段と遅くなってしまった。しかも、飛行する高さも随分と低くなっており、もはや電線の高さよりも低い場所を飛ぶようになっていた。それに気づいた時、私の体は地面に降り立ち、そこからは地上を移動することになった。

自宅目の前の踏切のある交差点の脇には小さなスーパーがあり、中から大学生が二人出てきた。彼らとは特に面識がなかったのだが、彼らの歩く方向が先ほどのスーパーの方向だったので、「あのスーパーには近づかないほうがいい」と私は述べた。すると彼らは、「先ほどまでそのスーパーにいて、強盗に遭遇して大変でしたよ」と述べた。どうやらすでにあの事件は解決していたらしい。

それを知ってホッとした私は、彼らと別れてから、安堵の気持ちを持って自宅に向かった。自宅のマンションに到着すると、自分がどの部屋に住んでいるのか少々わからなかった。しかし、大学時代にここに住んでいた時の記憶がなんとなく蘇ってきて、自分の部屋は三階だと思った。自分の部屋だと思った場所のドアを鍵で開けようとする、鍵を入れる必要はなく、ドアが開いた。

見るとそこには、見知らぬ男性がいて、どうやら部屋を間違えてしまったことがわかり、誤ってすぐにドアを閉めた。そしてその隣のドアを開けようとする、再び鍵を使わずともドアが開き、今度は若い女性がそこにいた。またしても部屋を間違ってしまったようであり、その女性に誤った。そこで私は、部屋を覚えていない自分に対してどうしたものかと思ったが、部屋の鍵をしないまま生活をしている人たちに対してもどうしたものかと思った。先ほどの強盗事件が頭にあったため、この辺りはそれほど安全な場所ではないという考えがあったのである。

私の部屋は、その女性の部屋の隣にあるようだった。鍵を使ってドアを開けると、今度は間違いなく私の部屋だった。自分の部屋に入る瞬間に、誰かが下から猛烈な勢いで自分の部屋に向かっている感じがしたので、それが君悪く、すぐに部屋に入り、内側から鍵をかけた。靴を脱ぎ、部屋に一步足を踏み入れると、隣の部屋の女性とその友人が話しをしている声が聞こえた。彼女たちの笑い声がこちらの部屋にまで聞こえてしまうようだった。

自分の部屋を見た瞬間、それがとても狭く感じた。おそらく8畳近くあると思うが、大学時代の自分はこんな狭い部屋に住んでいたのかと驚いた。もうこのような狭い部屋には住みたくないと思っていたところ、先ほど部屋を間違えてしまった男性の部屋とは反対側の隣の隣は、経営学関係の著名な大学教授が奥さんと一緒に住んでいることを思い出した。このような狭い部屋でよく生活ができるなど思ったところで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/2/5(火)07:15

No.1648: Winter Refreshingness

Although it is raining outside, I can perceive winter refreshingness in my mind. Groningen, 10:28, Tuesday, 2/6/2019

3775. バス釣りのトーナメントに参戦する夢

時刻は午前七時を迎えた。もう三十分ほどしたら、徐々に夜が明けてくるだろう。

先ほど今朝方の夢について振り返っていた。あの夢の次に別の夢を見ていたことを覚えている。

夢の中で私は、おそらくフロリダだと思われる場所の川にいた。その川の脇には葦が茂っており、その川はバス釣りのメッカであった。川に到着した時に、そこで偶然にもフィールドホッケー部に所属していた大学時代の友人(HT)と出会い、彼とコンビを組んでバス釣りのトーナメントに参戦することになっていた。

早朝の早い時間であったが、すでに太陽も出ていて、非常にすがすがしい気持ちであった。彼とお互いのコンディションを確認し合い、お互いに調子が良いことがわかった。今回のトーナメントでは良い結果が出せそうだと思ったところで、私たちは早速ボートに乗った。まずは当初の予定通り、

葦の茂みと水中に沈んだ橋のある地点に向かった。私たちはその場所を最初のターゲットとしていた。

一投ほどルアーを投げてみたときに、友人と私は重大なことに気づいた。どうやら私たちは朝食を食べておらず、さらには昼食も持参していないことに気づいたのである。今日の試合は、夕方までかかるものであり、これはまずいと思った。そこで私は彼に提案し、もう何投かルアーを投げて次のポイントに移動するときに、私を途中で降ろしてもらい、ご飯を買いに行くことにした。友人は「それは助かる」と述べており、私はボートを降りて、急いでご飯を買いに行くことにした。そのような夢を見ていた。

今朝方は、実際にはまた別の夢を見ていたように思うが、今はそれを思い出すことができない。また、書き留めた二つの夢に関しても、もう少し細かな場面があったように思う。それらに関して思い出すことができれば、また書き留めておこうと思う。

最初の夢に関しては、大学時代に実際に住んでいた国立市が現れる夢を初めて見たのではないかと思う。それに付随して、当時自分が実際に住んでいたマンションが夢の中で現れることも初めてであったように思う。夢の中では、そのマンションの部屋の狭さをかなり嫌がっているようであった。当時はそのようなことは一切感じず、8畳もあれば十分だと思っていたが、今となっては非常に窮屈な空間で生活をしていたのだと思う。

無駄に大きな家に住む必要は全くないと思うが、七年間の欧米生活を通じて、心の広さと空間的な広さにはどこか繋がりがああると思うようになり、適度な生活空間を確保することはやはり重要だ。生活空間の狭さは、心の空間も狭めてしまう恐れがある。

また、偶然立ち寄ったスーパーで遭遇した強盗事件に関しても、驚きこそあったが、恐怖心は一切なく、私はとても冷静であったように思う。買い物客たちはかなり怯えた様子を見せていたが、そうした様子を観察しながら、強盗の男性の雰囲気と言動から、怯える必要など全くないということを私は考えていた。最初の夢に関してはその他にも、空中を飛んで移動するのではなく、空中を泳ぎながら移動していたことも印象に残っている。空を飛ぶ夢はこれまで何度も見ているが、空を泳ぐ夢は

初めてなのではないかと思う。水中を泳ぐ以上に、空中を泳ぐことの方が大変なのかもしれないということが、身体感覚を通じて理解できる。

二つ目の夢に関しては、過去に海で釣りをする夢を見たことは何度かあるが、川でバス釣りをする夢は初めてだったと思う。さらには、本格的なトーナメントに参戦するというのも今回初めてであり、その試合にどうして大学時代の友人である彼と出場したのかも謎だ。人間発達が未知なる自己を既知なる自己に変容させていく営みであるならば、夢が示唆する事柄を理解していくことは重要になるだろう。フローニンゲン:2019/2/5(火)07:39

No.1649: Morning & Afternoon & Evening

In reality, there is no distinction between morning, afternoon, and evening. Humans just concoct the artificial distinction. What there really exists is just the movement of the sun and our movement. Groningen, 14:50, Tuesday, 2/6/2019

3776. サブドミナントマイナーとセカンダリードミナント

時刻は午前八時半を迎えた。目覚めた時は闇の世界であったため気づかなかったが、今朝は霧が深い。この時間になっても霧が立ち込めており、辺りはいつもと違った雰囲気放っている。

早朝に、モーツァルトに範を求めて作曲実践を行った。その際には、サブドミナントマイナーを活用して実験を行った。これは主に長調の曲を作る際に、同主短調から一時的に音を借用する方法のことを指す。サブドミナントマイナーを活用することによって、長調の曲でありながらも短調の響きをもたらすことが可能になる。

今回の実験では、とにかく最初は課題レベルを下げるためにも、わかりやすいKey-Cを活用するようにした。もちろん今回は実験であったから、できるだけサブドミナントマイナーを多用しようという意図があり、すべての音が綺麗に響いたかというところではない。今後は、曲の文脈を考慮して、適切なタイミングでそれを活用しようと思う。

昨夜の作曲実践では、セカンダリードミナントを活用して実験をしていた。これは、ドミナントモーションをI以外のダイアトニックコードに対して適用するものである。昨夜の実験中も、「これは面白い」と

いうことを一人でつぶやいていたように、これは非常に興味深い手法である。セカンダリドミナントを活用すると一時的に転調しているように思えるため、曲の色がより多彩になる点が特徴だ。

この手法に関しても、まだまだ実験を重ねていく必要があるため、午前中に再度モーツァルトに範を止める際にはこの手法を活用したいと思う。そして、昼食前の作曲実践では、セカンダリドミナントとサブドミナントマイナーの双方を活用した曲を作ってみる。

自分が試したいと思うアイデアや習得したいと思う技法に関しては、とにかく実際の作曲実践の中で活用してみることが重要だ。これは当たり前だが、作曲理論の解説書を読んでいるだけでは、いつまでたってもそこに書かれている技術を活用できるようにはならない。実験的な態度をもって、常に試行錯誤を通じて実際に知識を活用してみることが大切になる。

今日も昨日に引き続き、シュタイナーが音楽について論じている“Music: Mystery, Art and the Human Being (2016)”や、ジョン・オーリッツの“The Tao of Music: Sound Psychology (1997)”を読み進めていく。それに並行して、作曲の技術的な理論書を読んでいく。とにかくこれからしばらくは、作曲学習と作曲実践において、パターン解析、パターン認識、そしてパターン創出の三つを核に据えていこうと思う。今日も音楽に彩られた一日になるだろう。フローニンゲン:2019/2/5(火) 08:58

3777. 閉じられるドア・開かれるドア:死の先取りとしての夢及び音楽体験

時刻は午後の三時半を迎えた。今日は嬉しいことに、天気予報を裏切る形で、午後からは太陽の光が燦然と地上に降り注ぎ始めた。早朝の予報では一日を通して曇りとのことであったが、午後からは晴天に恵まれた。そのため、午後に仮眠を取った後、つい先ほどまで、30分ほどランニングとウォーキングを行っていた。

今日は近くの運河沿いのサイクリングロードを走ったり、歩いたりしていた。その最中、絶えず自覚的な自己があり、自己及び自己が絶えず生起するそのプロセスを観察し続ける意識が芽生えていた。このサイクリングロードを走ったり、歩いたりするときは、ある一つのマンションを折り返し地点にしている。そのマンションは、一年前か二年前の日記で言及したように、一風変わった巨大な絵が壁に描かれている。それは宇宙空間の中に浮かぶ三つのドアと、開かれたドアから光が発せられて

いる姿を描いている。私はこのサイクリングロードを通る際には、いつも必ず意識的にこの絵を眺めている。今日は、その絵がよく見える地点で立ち止まり、しばらくぼんやりとその絵を眺めていた。

ドアは開き、ドアは閉まる。そして再びドアが開く。これはどこか私たちの人生そのものに思えてくる。

今から六年前、私がジョン・エフ・ケネディ大学を卒業した時、私は博士課程の進学を考えていた。だが、出願した大学から受け入れられなかった私に対して、当時在籍していた統合心理学科のプログラム長であるヴァニース・ソリマー教授は、「一つのドアが閉じられることによって、別のドアが開かれる」と私に声をかけてくださった。その言葉をふと思い出した。

マンションの壁に描かれた宇宙空間は闇なのだが、そこにドアから光が差し込んでいる。その様子もまた意味深長だ。

今日もまた、人生のある一日が静かに始まり、静かに終わりに向かっていく。流れそのものも静かであり、私はその流れの中に溶け出してしまっているかのようだ。確かに日々は毎日結晶化されていくように感じるのだが、同時にそれは溶けて時間の流れの中に還っていく感覚がするのである。依然として、毎日が水の流れのごとく進行していく。日々は如水である。

今朝方、ミハエル・エンデの父であるエドガー・エンデが、夢は死という現象の先取りであると述べていたことについて考えを巡らせていた。そこに、ここ数日読んでいたシュタイナーの書籍で書かれていた記述を加味すると、作曲者の霊性が凝縮された、ないしは霊性が発露した音楽を聴くことは死の先取りなのではないかと思えてきた。いや、そのみならず、自らの霊性を発露させる形で曲を創造することは、死の先取りと言えるのではないかと思えてきたのである。端的には、音楽体験は即身成仏たり得るのではないだろうか。そんなことを思うのである。

ここ最近、私が仮に博士号を取得するほどに探究したいテーマがあるとすれば、それは霊性と死だと考えていたことが納得できる。そこに芸術を関連付けて、芸術・霊性・死というこの三つが自分が長らく従事する探究テーマになる予感がしている。依然として、夕方の太陽の光がフローニンゲンの街に降り注いでいる。フローニンゲン:2019/2/5(火) 15:42

時刻は午後の七時半を迎えた。つい今しがた夕食を摂り終え、これから就寝までの時間を使って、もう少し自分の取り組みを前に進めておきたい。

それにしても今日もまた素晴らしい一日であった。どこがどう素晴らしかったのかがわからないぐらいに、そしてそれを語る必要が全くないと思うぐらいに素晴らしかった。

欧州での三年目の生活は幾分奇妙だ。いや、これまでの人生の方こそが奇妙だったのかもしれない。

欧州での三年目の生活は、これまでにないほどに充実している。昨日か今日のどこかの日記の中で、楽しみというのも深まっていくと述べたが、それは充実感においても当てはまる。日々の充実感、そして真に自らの人生を生きているという実感は本当に深まっていくものなのだ。

今日はこれから、バルトークに関する作曲技術に関する解説書“Bela Bartok: An Analysis of His Music (2000)”を読み返し、以前に読んだことのある“A Guide to Musical Analysis (1987)”を読み返していく。

楽譜を分析する観点を獲得することは、即作曲でその観点を活用していく道を開いていくことを意味する。とにかく今の時期は集中して音楽理論を学んでいきたい。

音楽理論とは、美しい響きをもたらす規則性に関する発見事項の束、ないしは体系なのだ。その体系を少しずつ理解し、既存の体系に新しい何かを積み重ねていくことができたらと思う。

楽譜を見たときの理想の境地としては様々なことが考えられるが、一つとしては、一つ一つの音の意味、そしてハーモニーやメロディーを含む音の構造の意味をつぶさに把握できるようにしたい。そして、作曲家がどのような意図でそれらを具現化させていったのかを掴めればと思う。何はともあれ、楽譜の中に顕現しているありとあらゆる様々なパターンを即座に把握し、それらを自分の言葉で説明できるようにしていく。それを実現させていくためには、音楽理論家の探究の成果に頼らせてもらう形で、積み上げられた音楽理論という体系を一つ一つ理解していく。

音楽理論の起源がピタゴラス、あるいは下手をするとそれ以前の学者の功績にあることを知れば、音楽理論の学習は気の遠くなるような実践かもしれないが、私は進んでそれに乗り出していく。

音楽理論を通じて得られることは、おそらく自分自身の言葉なのだろう。私たちは、まだ姿を見せぬ自分独自の言葉を常に持っている。音楽に関する自分独自の言葉を発見していくために、過去の偉人たちの仕事を参考にさせてもらう。音楽理論の学習は、兎にも角にも、自らの言葉の発見と獲得なのだ。

夕方に作曲実践を行っている最中に、改めて作曲とは、音の創造のみならず、音を活用した絵画の制作なのだと気付いた。一つの音符を楽譜上に置くことは、画用紙に一筆入れることに他ならない。また、一つ一つの音には、文字どおり音色が存在しているのである。作曲というのは、音を用いた絵画の制作だったのだ。

そのようなことに気づき、ますます絵画芸術への親近感が増し、今後は過去の偉大な作曲家の仕事のみならず、過去の偉大な画家の仕事の参考にすることが多くなるだろう。このリアリティが、そして日々が、音楽であり、なおかつ絵画のように思えてくる。フローニンゲン:2019/2/5(火) 19:48

3779. 狛犬になることから始まった今朝方の夢

今朝は六時半を迎える前に起床し、七時を前にして一日の活動を始めた。昨日は、太陽の光が降り注ぐ穏やかな一日であり、午後に散歩に出かけたこともあってか、深い睡眠が取れ、今朝の目覚めは非常に良かった。太陽の光を浴びながら散歩すること、そして早めに就寝したことが、今朝の気力につながっているのだと思う。

今朝方もいくつか夢を見ていたため、忘れる前にそれらを書き留めておきたい。夢の中で私は、なぜか小さな狛犬になっていた。何かをするわけでもなく、狛犬としてグラウンド上にたたずんでおり、ただしそれは何かを見守っているようではあった。私は狛犬であったから、人間の言葉を話すことはできなかったが、人間の言葉を理解することはできた。

だが、そうだからといって、その場に誰か人間がいたわけではなく、私は狛犬としてポツリとグラウンドの上にたたずんでいただけであった。すると、いつの間にか私は元の人間の姿に戻っていた。グ

ラウンドを眺めると、かつて天才と言われ、その後消えてしまったサッカー選手がその場において、一人でサッカーの練習をしていた。私はその方に声をかけ、しばらく一緒にサッカーの練習をしていた。

気がつくと私は、グラウンドではなく、学校の教室の中にいた。そこには、中学1、2年生の時に担任を務めてくださった先生と、当時のクラスメートがいた。教室では何か授業が行われていたわけではなく、ホームルームが行われていた。私は、先生の話に耳を傾けながらも、その話の内容とは全く違うことを考え続けていた。

ホームルームが終わりに差し掛かる時に、先生がクラス全体に向かって、「この中で誰かパソコンを持っている人はいるか？」と尋ねた。他のクラスメートはパソコンを持っていなかったようであり、ちょうど私はパソコンを持っていたので、「持っています」と答えた。すると先生はそこからさらに、「では、50人ほどがそのパソコンにアクセスし、課題に取り組めるように、一つソフトをダウンロードしてくれないか？」と尋ねてきた。正直なところ、それはどこか面倒な気がしたし、50人が私のパソコンにアクセスしてくるというのもあまり気持ちの良いものではなかった。

また、私のパソコンは、そのソフトをダウンロードするほど空き容量がないのではないかと考えていた。そこで私は、「このパソコンはすでに六年ほど使っていて、ソフトをダウンロードする空き容量がないのではないかと思います」と述べた。すると先生は、「大丈夫だ」と述べたが、私は大丈夫そうではないと判断し、その申し出を拒否した。しかし先生は、やたらとそのソフトをダウンロードするように私に持ちかけてくるので、少々うんざりし、先生が話を続けている最中に、「それでは失礼します。帰りますね」と述べて、教室から出て行こうとした。

先生は、教室を出た私を追いかけてきて捕まえようとしたので、私は急いで階段を降り、靴箱で靴を取ってから、急いで校舎の外に出た。私は正門から外に出るのではなく、靴箱の横にある裏口からずっと外に出た。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/2/6(水)07:14

No.1650: Juice of a Durian

It is a piece of music that embodies the juice of a durian. Groningen, 21:20, Wednesday,
2/6/2019

つい先ほど、今朝方の夢について思い出していた。小さな狛犬に自分が変化したことは、何を示唆していたのだろうかと改めて考えている。本来、狛犬は神社を守る存在だと思うが、夢の中の狛犬としての私はグラウンドにいた。仮に狛犬の役割を、神社のみならず、聖域を守るものと拡張させて捉えれば、グラウンドを聖域として見なすことができるかもしれない。

それでは、あのグラウンドは一体何の聖域だったのだろうか。それは何の変哲も無いグラウンドであったが、よくよく考えてみると、狛犬としての私はあの物理的なグラウンドを守っていたのではなく、万物の全てが生起される基底 (ground) を守っていたのではないかと思わされる。

そこから私は、自分の役割はもしかすると、万物が創造される基底を守ることなのではないかと思ったのだ。より厳密には、万物が創造される基底を守り、それを育むことが自分の役割であり、それを自らの創造行為を通じて行っていくことが、自分に与えられた一つの重要な役割なのではないか気づかされたのである。夢の中に現れた狛犬を、最初は不思議な存在だと思っており、それが何を象徴しているのかについては全く想像もつかなかったが、今上記のことを書き出して、狛犬が象徴していた事柄が大変腑に落ちる。

その次の夢の場面で出てきたサッカー選手が象徴していることが何かはわからないが、さらにその次の夢の場面は、いろいろと気づくことがある。そこでの主題はこれまでの夢でも再三現れていたものであり、権威に対する反発、ないしは師匠に対する諦めがテーマになっている。

この世界には、おそらく本当に自分の師と呼べるような存在がどこかにいるのだと思うが、そうした存在になかなか出会わないものである。もちろん、これまでの人生において、優れた先生や師と呼べるような存在はいたが、ことごとくその関係は長続きしない。たいてい一年や数年でその人から離れるということをこれまでの人生で繰り返していた。

私が受けてきた学校教育の場においては、シュタイナー教育の仕組みとは異なり、担任の先生は基本的に毎年変わるため、それは強制的に自己と師を引き離すことになっていた。もしかしたら、それが一つの要因となり、その後の人生においても、師からすぐに離れていくことが当たり前になってしまっているのかもしれない。

師弟関係というのは実に難しく、本当の師を見つけ、長大な時間にわたってその師から学びを得られることは幸運なのだが、別の見方をすれば、その師は無能な師だと言えるかもしれない。なぜなら、長大な時間をかけているにもかかわらず、師匠離れができるほどに弟子を育てることができていないと見ることもできるからだ。

これはよく言われることだが、自分を乗り越えられるように弟子を成長させられないような師は本当の師ではないのだろう。師の側にも、弟子の側にも、お互いに離れたくないという癒着的感情、つまりは「離れて欲しくない」「離れたくはない」という感情が無意識の中にあるのかもしれない。

夢の中で私はたいてい、過去にお世話になった先生や師匠を「無能」だとみなし、彼らから必ず離れていく。しかもそれは、極めて反抗的な形でなされ、言葉を用いて徹底的に先生や師匠を殺しにかかるか、実際に物理的に格闘を始め、圧倒的な力の差で先生や師匠をねじ伏せる。そうした夢の中の自分を見ていると、もしかすると、過去にお世話になった先生や師匠は、ある側面では決して無能なのではなくて、私を真に育み、「師匠越え」を果たさせてくれたという点において、彼らは全員唯一無二の真の師だったのではないかと思う。

本当に、そして奇妙なほどにことごとく、夢の中で出てくる先生たちは、私と対峙し、私に乗り越えられていく。もう一度述べると、彼らは決して無能だったのではなく、真に弟子を育むということに関して極めて有能であり、私にとってこれ以上ないほどに大切な存在だったのだ。

やはり自分のこれまでの人生には、絶えず素晴らしい師が存在していたことに気づき、その縁に対して感謝の念は尽きることがなく、そうした師を生み出し、そうした関係性を生み出した基底そのものに感謝をしなければならない。だから私は、森羅万象が生起する基底を守り、それを育むことを役割として引き受けたのだと思う。フローニンゲン:2019/2/6(水)07:14

No.1651: Back and Forth

Everyday is up and down, and back and forth. Groningen, 08:45, Thursday, 2/7/2019